

太宰府の文化財

401

鎌倉時代の道の跡 観世音寺一丁目

昨年(2019年)の2月に大宰府条坊跡(第317次)の発掘調査を行いました。この調査では、鎌倉時代の道の跡が見つかりました。今回はこの道の跡についてお話しします。

大宰府条坊跡は、大宰府政庁前からのびる朱雀大路(すざくおほじ)の東西に、碁盤の目状に土地が区画された都市遺跡です。朱雀大路の東側を左郭(さかく)、西側を右郭(うかく)と呼び、東西方向の道を条路(じょうろ)と

南北方向の道を坊路と呼びます。調査を行った場所は、大宰府条坊の左郭6条4坊と5坊の区画にあたり、左郭4坊路の推定ラインにあたる場所です。

調査では4坊路推定ライン上で、南北方向にのびる道が見つかりました。写真1は鎌倉時代の道の調査途中の様子を撮ったものです。中央には路面と、その両脇には溝が見えま

す。路面は幅約1mほどで、硬く締まった土の面が広がっていました。さらに調査を進めると、硬く締まった路面の下には小石や土器・陶磁器の破片を敷き詰めた状態を確認しました(写真2参照)。これは路盤と考えられ、路面の下に小石などを敷き詰めることで、路面が崩れないように、また歩きやすいように工夫をしていたようです。

路面の両脇に見える溝は道の側溝です。溝はやや蛇行しながら道と並行しており、路面に水が溜まらないように、排水が行われていました。遺跡の南側には御笠川が流れており、水は溝を通じて御笠川に流れていったと考えられます。

この遺跡は11〜12世紀中頃の御笠川の氾濫で地盤が流され、古代後期から中世初期に復興された土地で、現場で発見された道は、少なくとも2回つくり直されていることがわかりました。道はつくり直されるたびに東に少しずつずれ、路面のつくり方や道幅が変わっていきました。また道は、かつてあった大宰府条坊跡の左郭4坊路を踏襲した位置と方向でつくられていることがわかりました。

文化財課 中村 茂史



写真1 南北にのびる道と溝



写真2 路面の下に敷き詰められた小石